(2) もと動詞であるものの尾に附いた尾辭。

〃て、　諂ひて、　遣りて。

〃げ、　物思ひげ。　心ありげ。

〃さ、　歸るさ、　入るさ。

(3) もと形容詞であるものの尾に附いた尾辭。

〃さ、　高さ、　嬉しさ。　〃げ、　苦しげ、　淸げ。

〃み、　赤み、　深み。

(ロ) 代名詞となる尾辭。

(1) もと代名詞であるものの尾に附いた尾辭。

〃ら、　彼ら、　汝ら、　此處(ココ)ら、　其(ソ)ちら。

〃どち、　我どち。　〃たち、　汝たち。

〃ども。　私ども。

(ハ) 動詞となる尾辭。

(1) もと名詞であるものの尾に附いた尾辭。

〃めく、　春めく、　時めく、　今めく。

〃ばむ、　氣色ばむ、　由ばむ、　心ばむ。

〃ぶ、　大人ぶ、　田舍ぶ、　鄙(ヒナ)ぶ、　都(ミヤコ)ぶ。

〃じむ、　田舍じむ、　汗じむ、　垢じむ。

(2) もと形容詞であるものの尾に附いた尾辭。

〃がる、　嬉しがる、　苦しがる、　寒(サム)がる。

(3) もと動詞であるものの尾に附いた尾辭。

〃ばむ、　萎えばむ、　老いばむ、　枯ればむ。

(ニ) 形容詞となる尾辭。

(1) もと名詞であるものの尾に附いた尾辭。

〃し、　大人し、　誠し、　男々(ヲヲ)し、　女々(メメ)し。

〃らし、　男らし、　人らし、　愛(アイ)らし。

〃がまし、　人がまし、　烏滸がまし、　侮がまし。

(2) もと動詞であるものの尾に附いた尾辭。

〃し、　羨まし、　喜ばし、　戀ひし。

〃たし、　愛でたし、　見たし、　聞きたし。

(3) もと副詞であるものの尾に附いた尾辭、

〃し、　轉てし、　遙けし、　靜けし。

(ホ) 副詞となる尾辭。

(1) もさ名詞であるものに附いた尾辭。

〃に、　誠に、　常に、　時に。　〃さ。　旨さ。

(2) もさ動詞であるものに附いた尾辭。

〃さ、　有りさ(有る)、　生きさ(生く)、　生れさ(生る)。

〃に、　試みに、　連りに、　泣きに(泣く)、　走りに(走る)。

〃て、　敢へて、　極めて、　せめて。

(3) もさ副詞であるものに附いた尾辭。

〃さ、　からくさ、　するくさ、　はらくさ、　長々さ、　遙々さ。

凡、右の通りであって、之れはもさの語の性質を變へて、他の品詞にする力がある。　然し尾辭だけでは、動詞にも、形容詞にも何にも成らぬのである。

是れで頭辭、尾辭の事は終りである。　乃ち第二章も是れで終り。

第三章　文

文は語を編み合せて成り、一つのまとまった事柄まとまった思想を言ひ表はすものである。　之れを書き記した字は、矢張語を書き記した字を、縱に並べたものであって、

之れに點を加へて、其の斷れ續きを示す。

梅の花は甚香し。

此の家はいつ出來上がるべきか。

あはれ、清く涼しき流れかな。

速に歸り來れよ。

茲で文といふのは、通例、文章とか、辭章とか、成句とか種々に名が附けてあるものであるが、つまり、語が幾つか集まって、一つのまとまった事を、述べたものを云ふのである。

第一項　文の成分

文を組み立つる語を、文を組み立てた上での關係に依って、分けて見れば、五種に成る。　主語、説語、客語、屬語、間投語乃ち是れである。

(一) 主語は文の主部となる語である。

(二) 説語は文の説明部となる語である。

(三) 客語は主語、説語、或は他の客語に添ひて、之れを限定する語である。

（四）屬語は主語、説語、客語或は他の屬語に附いて、之れを助くる語である。

（五）間投語は語或は文の上下にあって、接續、感歎、呼掛等を爲す語である。

（客）—（屬）（主）—（屬）（客）—（屬）客—（屬）説）—（屬）
春の花は秋の紅葉より優れり。

（間）（主）（間）（主）—（屬）（客）—（屬）（説）—（屬）（客）（客）—（屬）（説）—（屬）—（屬）
嗚呼、正行及び正時は四條畷に奮戰して、遂に忠死を遂げたりき。

語を、右の如くに、文を組み立てた關係で、文の成分として、五種に分くる事と、第二章で述べた如く、其の性質で九種に分くる事との差ひは、一寸家に譬へて言はば、其の材料を、木とか、石とか、土とか、竹とか言ふ樣に分くるは、家を造る物品の性質から見たのであって、家の部分を、家根とか、天井とか柱とか、壁とか云ふ樣に分くるは、家を組み立てた上での關係から見たのであるが、丁度其んなものである。名詞とか、動詞とか云ふのが、木とか、石とか云ふのに當り、其の名詞や動詞が、文で主語や説語に成る所が、木や石が家を作れば、天井や柱に成る所に當る。

之れから、右の五つの成分に就いて述べて行かう。

第一　主語

主語は文の主部となる語であって、名詞、代名詞の主格（第一格）のものに限る。其説明としては、動詞か形容詞かが來るに定まって居る。而して、主語は常に其の説語の上に來る。

（主）（説）
櫻の花いと美し。
名、主（一）　形

（主）（説）
彼れは學校に行きたり。
代、主（一）　動

主語が幾つか連合して、同じ説語に對する時は、之れを合主語と云ふ。

（主）（主）（主）（合主）（説）
敎師、生徒、保証人みな一堂に集まる。

（主）（主）（合主）（説）
忠と孝とは人の大道なり。

主語が文の中に省いてあることがある。其の時は主語を入れて見れば、意も通じ、文の形も具はる。さて其の省き方に、只省いたのと、又上に來る客語はあって、其の下の主語だけ一寸省いたのと二通りある。之れは何れも同じ語を度々繰り返す

のを避くる爲に省くのであるから、其の前後を推して考ふれば、すぐ分かるのである。

(イ)　只主語を省いた例

雅房の大納言は才かしこく、よき人にて、院大將にも爲さばやと思しける頃、院の近習なる人、「只今臣淺ましき事を見侍りつ」と申されければ、院「何事ぞ」と問はせ給ひけるに、近習「雅房卿鷹に飼はむとて、生きたる犬の足を切り侍りつるを、臣中垣の穴より見侍りつ」と申されけるに、院うとましく、にくく思召して、日頃の御氣色もたがひ、雅房卿昇進もし給はざりけり。

(ロ)　上の客語だけ殘して主語を省いた例。

瞿麥は、唐の瞿麥は更なり、大和の瞿麥もいとめでたし。

梅は、白き梅も赤き梅も皆をかし。

主語と説語との間には、点は打たぬのが通例であるが、其の説語が句であるか、又は客語句が其の間にあるかする時は、主語と是等の句との間に句点を打つ方が善い。

梅の花は、香高し。

我れ、彼れの持てる書を得む。

彼れは、「我れ之れを知らず」と、答ふ。

又、主語が數多あつて、同じ説語に對する時、乃ち合主語である時に、其の間に、接續詞や接續助詞が無ければ、之れも句点を打つのが通例だ。

楠正成、新田義貞、北畠顯家、名和長年等皆大に王事に勤めたり。

西郷、木戸、大久保は維新の三傑なり。

又、主語に添うた客語が客語句である時には其の主語の下に句点を打つ。

西郷と木戸と大久保とは維新の三傑なり。

汝が持てる繪は、甚美し。

香高き花は、殊にめでたし。

第二　説語

説語は文の説明部となる語であつて、動詞、形容詞に限る。其の主としては、名詞か代名詞かが上に無くては成らぬ。説語は常に其の主語の下に來るものである。

櫻の花いと美し。

彼れは學校に行きたり。

説語が幾つか連合して、同じ主語に對する時は、之れを合説語と云ふ。此の場合

には（間に接續詞の有る無きに係らず）句点を打つ。

鳥は啼きつゝ、飛ぶ。

甲、乙、丙、丁林に入り、蟬を捕ふ。

此の石は堅く、白く、美し。

犬啼いて、走る。

虫飛びて、火に入りて、死す。

一つの文が説語と成つて、他の主語に對する事がある。之れを説語句と名づけて置く。

橘の花は香高し。

東京(主)は日本の(客)首府(客)にし(有り)(説)て、人口(主)甚(客)多し(説)。（説語句）（合説）

説語句と主語との間に句点を打つことは主語の條に述べた通りだ。

橘の花(主)は、香(主)高し(説)。（説語句）

説語は其の主語又は客語に或る助詞が附いて居る時は、其の終止法を連体法又は已然法の形に代へて終止法とするのである。之れを係結法と云って、その助詞を係(カヽリ)、其の説語の連体法や已然法の形をするものを結(ムスビ)といふのである。但その説語に助動詞が附いて居れば、最後の助動詞がその結(ムスビ)をするのであって、説語(動詞、形容詞)は係(カヽリ)の影響は受けぬ。係結法は五個の助詞が係(カヽリ)となるに随って、左の二様の結(ムスビ)をする。

(一)　係(カヽリ)がぞ(強押)なむ(強押)や(疑問)か(疑問)である時は、其の結びは連体法である。

(二)　係(カヽリ)がこそ(殊別)である時は、其の結(ムスビ)は已然法である。

玉(主)ぞ砕くる(説)。

人丸(主)なむ歌の聖なりける(説)(属助動)。

梅と櫻(主)と何れか優れる(説)(属助動)。

其處に人(主)や有る(説)。

人(主)玉(客)をぞ(属)砕きつる(説)(属助動)。

人丸(主)は歌の(客)聖に(属)なむありける(説)(属助動)。

汝(主)は何れ(客)をか(属)取る(説)。

人(主)は其處(客)にや(属)有る(説)。

雪(主)こそ降れ(説)。

(主)げに面白き限り(客)とこそ(属)云ふ(説)べけれ(属助動)。

説語が終止法又は結の連体法、已然法で文の終りを爲す時には、その下に章点を打つ。

花(主)咲く(説)(終止)。　水(主)なむ落つる(説)(連体)。

誰れ(主)か有る(説)(連体)。　人(主)こそ有れ(説)(已然)。

説語も文の中に省いてあることがある。其の省き方も只省いたのと、又上に來る客語は有って其の下の説語を省いたのと、二通りある。理由は主語のと同じことである。

(イ) 只説語を省いた例。

集は、古萬葉集(主)、古今(主)、後撰(主)(合主)めでたし。

度々の負けに「今日こそ、我れ(主)は(勝ため)」(客)と思ひて。

(ロ) 上の客語は有って其の説語を省いた例。

花(主)は盛りに(客)(有りて)、月は隈なし。

横濱(主)は東京に(客)(近し)、神戸は大坂に近し。

説語と其の客語との間は句點を以て別つこと無き筈なれども、客語が句である時は句點を其の間に打つ。

我れ(主)は、彼れ(主)の持てる(説)書(客)を(客語句)、得む(説)。

彼れ(主)は、我れ(主)之れ(客)を知らす(説)と(客語句)、答ふ(説)。

説語が、連用法から他の句に續く時は其間に句點を打つ。

夏(主)は暑く(説)、冬(主)は寒し(説)。

第三　客語

客語は主語、説語、或は他の客語に添うて之れを限定する語であって、第二、三、四格の名詞及び代名詞と連体法の動詞及び形容詞と副詞とに限る。客語は其の限定する主語、説語、客語の上に來る。

(イ) 第二格の名詞、代名詞、(主語(名詞代名詞)客語(名詞代名詞限))に添ふ

(ロ) 連体法の動詞、形容詞、(全)

(ハ) 第四格の名詞、代名詞、(說語(動詞限)客語(動詞限))に添ふ

(ニ) 第三格の名詞、代名詞、(說語(動詞、形容詞)客語(動詞、形容詞限))に添ふ

(ホ) 副詞、(全)

關東[名(二)(客)]の人[(主)]は大に[副(客)]武[名(四)(客)]を好む。

彼[代(一)(客)]の紅葉[(主)]は二月[(名二)(客)]の花[(名三)(客)]よりも赤し[(說)]。

速に[副(客)]歩む[動(連体)(客)]者[(主)]は早く[副(客)]疲る[(說)]。

五尺[名(三)(客)]より低き[形(連体)(客)]人[(主)]は少し[(說)]。

數多の客語が一語に添ふことがある。

(イ) 主語、客語の名詞、代名詞に添ふ客語は、第二格の名詞、代名詞と連体法の動詞形容詞とである。此の時は、連体法の動詞は連体法の形容詞より上に、連体法の形容詞は第二格の代名詞より上に、第二格の代名詞は第二格の名詞より上にあるを、通例とする様であるが、決めて言ふ事はむづかしい。相互の間には皆句點を打つ。

よく囀づる[動(連体)(容)]、美しき[形(連体)(容)]、二羽[名(二)(容)]の鳥[(主)]あり[(說)]。

此の[代(二)(容)]、二羽[名(二)(容)]の鳥[(主)]は甚[(容)]美し[(說)]。

(ロ) 說語、客語の動詞、形容詞に添ふ客語は、第三格、四格の名詞、代名詞と副詞とである。此の時は、副詞と第三格の名詞代名詞とでは、時刻は場所より上に、場所は人より上に、人は事物、狀体より上にあつて、其の次に第四格の名詞、代名詞が來るのが通例である。其の間には句點を打つ。

我れ[名(三)(主)]今日[名(三)(時)(客)]、學校にて[名(三)(處)(客)]、友人と[名(三)(人)(客)]、大いに[副(狀体)(客)]、球を[名(四)(客)]打ちたり[(說)]。

彼れは永く、彼處にて、法學を修めたり。

されども、此の順序は稍もすれば、或る語を強むる爲に、轉倒せらるゝ事がある。

大いに、今日は、球を打ちたり。

佛國にて、彼れは法學を修めたり。

今日彼れは佛國より歸りたり。

客語には、唯の動詞、形容詞でなく、主語を備へた動詞形容詞乃ち句で客語と成ったものがある。之れを客語句と云ふ。客語句のある主語、客語と他の語との間には句點を打つ。

雨降る日は、鬱陶し。

他人の言を其のまゝ引用した時は、之れも客語句と見るのである。此の時は引用句に引用點を施す。

我れは最、香高き梅を、愛す。

彼れは「我れ之れを知らず」と、答ふ。

他人の言の意だけ引用した場合は、体裁は之れとは違って、常の客語句の通りに成る。此の時は引用點は無し。

宣房の中納言御使にて、東へ下る。

此の事更に御門の知ろし召さぬ由、けざやかに言ひなす。

客語も文の中で省いてあることがある。之れは重に第二、三、四格の名詞、代名詞の方にあって、連体法の動詞、形容詞や副詞の方には無い。省き方は例の如く二様ある。

(イ)　只客語を省いた例。

我が父の之れを聞き給ひて、我れは君が志の程忘るべからず。息男幼き者にも非ず。我れ如何にとも定め難し。君彼れと之れを相計り給ふべし」と父答へ給ひ、其の明けの日、我れ父の許に參りしに父かくと我れに仰せられたり。

(ロ)　上に客語が有って、其の下の客語を省いた例。

心を痛ましむる事は、身を傷る事よりも害甚し。謀は速き事を貴ぶ。

第四　屬語

屬語は主語、説語、客語或は他の屬語に附いて之れを助くる語であって助詞助動詞に限る。常に其屬する語の下に來る。

昔、源の義經と云ふ大將ありけり。
(助(二格)　助(三格)　助動(過、終))

雨も降り、風も吹きて、昨日はいとこそ騒がしかりしが。
(助(添加)　助(添加)　助(接)　助(一格)　助(強)　助動(過、已))

説語の處で言った通り、助詞の「ぞ」「なむ」(強抑)「や」「か」(疑問)が係となって文の終りの用言を連体法で結ばせ、「こそ」(殊別)が係となっては已然法で結ばする事に成る。助動詞は動詞の下に附くから、其の場合には動詞に代って右の結をするのである。

花こそ咲かざれ。
(助(殊別)　助動(否定、已然))

この花何時かわ咲くべき。
(助(疑)　助動(推、連体))

淸正は虎をなむ殺しける。
(助(強)　助動(過、連体))

係となる助詞は同じ文に二つ以上用ふる事は出來ぬ。例へば

今日ぞよき天氣になむある。

今日なむ何をか爲すべき。

彼れこう盗人にぞあれ。

と言ふ様な事は出來ぬ。

屬語と其が屬する語との間には句点は打たぬ。若し或る語の下に句点を打つべき場合に、屬語が附いて居ったら、其の屬語の下へ繰り下げて打つのである。

(主)大學は(屬)東京にも、(客)京都にも(客)あり(說)。

但し、直接に引用した客語句と、其の屬語句との間に引用点を打つのは仕方がない。

(主)太郎、「(主)それは(客)我なり(說)」(客語句)と、(屬)言ふ(說)。

屬語の中で、過去の助動詞を省いて、前後の文から推して知る様になった例が多い。

昨日は雨降り「たり」、風吹きたり。

今は昔、竹取の翁と云へる者ありけり。野山にまじりて、竹を取りつゝ、萬の事に使ひけり。名をばさるきの造となむ云ひける。其の竹の中にもと光る竹なむ一筋有りけり。怪しがりて、寄りて見るに〔ケル〕、筒の中光りたり。

〔けり〕　それを見れば〔ケレ〕、三寸許りなる人いと美しうて居たり〔けり〕。翁言ふ〔ヒケル〕やう、「…………」とて、手にうち入れて、家へ持ちて來ぬ〔にけり〕。妻の女に預けて養はす〔せけり〕。美しき事限無し〔かりけり〕。いと稚ければ箱に入れて養ふ〔ひけり〕。竹取りの翁此の子を見つけて後に、竹取るに〔リケル〕、節を隔てゝ、節毎に黄金ある竹を見付くる〔ケケリ〕事重なりぬ〔にけり〕。かくて翁漸豐に成り行く〔きけり〕。此の乳兒養ふ〔ヒケル〕程に、すぐ〳〵と大きく成りまさる〔りけり〕。三月計に成る〔リケル〕程に、よき程なる人に成りぬれば〔ニケレ〕、髮揚げなどさうして、髮あげさせ、几帳の内よりも出さず、齋き冊き養ふ〔ヒケル〕程に、此の乳兒の貌けうらなる事世に無く、家の内は暗き處なく、光みちたり〔けり〕。翁心地惡しく、苦しき時も、此の子を見れば〔ケレ〕、苦しき事も止みぬ〔にけり〕。腹立たしき事も慰みけり。翁竹を取る事久しく成り榮ねにけり。

第五　間投語

間投語は語或は文の上下にあって、接續、感歎、呼掛等を爲すものである。接續詞、感歎詞、第五格の名詞、代名詞に限る。

嗚呼、正行は途に四條畷に奮戰して、忠死を遂げたりけり。

人數多集まりて、歌ひ、且つ舞ふ。

あら、面白の景色やな。

間投語の中で、第五格の名詞、代名詞は客語を持ち、又客語句を持つことも出來る。

あの、花の咲き揃ひたる庭の景色よ。

第五格の名詞、代名詞は右の例の如く、獨立して一文の風を爲して居る事があるから、其の下へ章點を打つのが、通例であるが、感歎詞、接續詞は句點を打てばよい。例は其の前に擧げたのを見よ。

以上、文の成分に就いて述べた所を、括つて見れば、(1)主語、—合主語、(2)說語、—合說語、—說語句、(3)客語、—客語句、(4)屬語、(5)間投語、〇係結法、—句點、章點法、—省畧法、—引

用法、—語の位置、等である。

第二項　文の構造

文は語を編み合せて成るものである。此の、文を編み成す所の語をば、文の成分として分けて見た所を、前項で述べて置いた。茲では、その成分どもが、種々に集まって、文を構成して、種々の構造の違った文を作るから、其の出來た文の構造上の種類をざっと擧げて見る。

先づ、大きく見れば、文は章と句との二つに分かつ。

(甲)　章は或る事項を述べ斷りたる文である。

(乙)　句は或る事項を述べさし或は述べ斷りて、章の一部分をなすものである。

花美しく咲く。　(一章)

雨降り、雷鳴り、風吹く。　(三句、一章)

我れは、香高き梅を、愛す。　(二句、一章)

梅の花は、香高し。（一句、一章）

彼れは「我れ之れを知らず」と、答ふ。（二句、一章）

西鄉、木戶、大久保は維新の三傑なり。（一章）

甲、乙、丙、丁林に入り蟬を捕ふ。（一章）

章も、句も或る事項を述ぶるものであるから、少くとも主語一つと說語一つとは備へて居らねばならぬ。何となれば、主語と說語とが相對して始めて一つの事項が述へらるゝものであるからである。右の例を善く觀るべし。右の例の中で、第二番の例と、六番、七番の例とを比較して見よ。主語が幾つあっても、共同して他の說語に對し、又は數多の說語が共同して、他の主語に對して居ては、主語、說語の數が如何に多くとも、夫れ丈、多くの句を成すことは出來ぬ。其の代り、夫れ〳〵主語と說

語とが幾組にも相對して居れば、句の數は澤山に成る。

更に章、句の構造を詳しく見て行けば、

章—單章、合章、複章、連章、

句　單句、合句、複句、連句、

といふ樣な區別がある。

(一) 單章及び單句。主語、說語各一つづゝあって、一事項を述ぶるものを云ふ。

花咲く。（一單章）

梅の花早く咲きたり。（一單章）

月落ち、烏啼きて、霜天に滿つ。（三單句）

(二) 合章及び合句。合主語或は合說語が有って、合同したる一事項を述ぶるものをいふ。

忠と孝とは人倫の大道なり。（一合章）

白石と樂翁公とは政事家にし〔あり〕て、學者なり。　（一合章）

彼れは、父と兄とが勉めて、得たる財を、悉く遣ひ捨てたり。　（一合句、一單句）

（三）　複章及び複句。　説語句又は客語句を備へて、複雜したる事項を述ぶるものである。

橘の花は、香いと高し。　（一複章）（一單句ト句片）

子は、親の集めたる財を、散す。　（一複章）（二單句）

花咲きたる庭は、いと景色善し。　（一複章）（二單句ト句片）

梅の花は、香善く、櫻の花は色美し。　（三複句）

（四）　連章及び連句。　二つ以上の句を連續して、數事項を述ふるものである。

雨降り、風吹きて、日暮る。　（一連章）（三單句）

彼れ退かば、我れも退かむ。　（一連章）（二單句）

春は來れども花咲かず。　（一連章）（二單句）

花咲く春もあれば、木の葉散る秋もあり。　（一連章）（二複句）

梅の花は、香高く、櫻の花は、色美し。　（一連章）（二複句）

君と臣とは義に依り、父と子とは親に依る。　（一連章）（二合句）

正成は湊川に戰死し、義貞は藤島に戰死したれば、南朝の勢益衰ふ。　（一連句ト一單句）（一連章）

（客語句）（主、説）（客語句）（主）（説）（客語句）（主）（説）（主）（説）
位高く、資財多く、身健なる人は少し。　（一連句ト一單句）（一複章）

第三項　文の体裁

文の体裁を分けて四通りに見ることがある。之れは余り必要な事では無いが、一寸知っては居らねばならぬ。体裁といふのは、構造とは又別であって、文の意味の方に關して言ふのである。先づ

（一）説明体。之れは或る事項を説明する文であって、必ず動詞、形容詞、助動詞の終止法で終って居るものである。

雨大に降る。

清國の前途は甚危かるべし。

（二）疑問体。之れは事項を疑問する文であって疑問の助詞又は連体法の動詞、形容詞、助動詞で終って居るものである。

汝は誰なるぞ。

我れは之れを如何に處分すべきか。

然る事眞に有りや。

誰れか之れを知るべき。

此の社稷をいかに爲む。

（三）感動体。之れは感動を表はす文であって、感歎の助詞で終って居るか、然なくば、感歎詞を具へて居る文である。

あな、心憂の者どもの言甲斐無さよ。

あな恐し、聞かじ、く。

いで疾く行きて、見ばや。

（四）命令体。之れは命令を爲す文であって、命令法の動詞、助動詞で終って居るか、又は禁止の後置詞で終って居るかであって下に感歎の助詞が一寸附くこともあるものである。

疾く行け。

必ずこの事爲遂げてよ。

君、之れを見給ひね。

斯の通りに四種に分けては見るが、實際は兩方を兼ねたものが多い。例へば

長四郎よ、取りて參らせよ。

山風よ、この花を吹き散らすな。

山風よ、吹きな散らしぞ。

眞幸（サキ）く有れかし。

（イ）　志願者は來る八日午前八時出頭すべし。

樹木を折り取るべからず。

是等は一体說明体の文であるが、實際は命令のつもりで用ひて居るから、說明体と云って、命令体と云はぬのは氣持が悪い。之れを眞の命令体にするのには

（ロ）　志願者は來る八日午前八時出頭せよ。

樹木を折り取るな。

とせねばならぬ。（イ）の通りでは

（ハ）　志願者は來る八日午前八時出頭するが可（ヨ）し。

樹木を折り取る事は宜しからず。

と言った樣なものである。されども暫く（イ）の例を命令体と言ってもよいとして置く。さて命令的說明体とでも言ふか。「べし」「べからず」だけを特別の取扱ひにする。

又

あゝ是れ果して誰れの罪ぞ。

あはれ支那の前途を如何にすべき。

是等は感動体と言ふか、疑問体と言ふか。兩方を兼ねて居るのである。致し方がないから、感動的疑問体とでも言ふか。兎に角兩方兼ねたものと言はねばならぬ。

あはれ君、必ずこの事爲（シ）遂げ給へよかし。

なども感動的命令体と言ふか。之れも兩方兼ねたものと言はねばならぬ。

（お）　君は其の時の母后の宮の御方の召使、高名の大宅（オホヤケ）の世繼とぞ言ひ侍りしかしな

（い）　打見渡せば、柳櫻こきまぜて、げにや都は春の錦なりけり。

是等も皆說明体であって、感動体を兼ねて居る。（い）の方に附いて居る「けり」は過去の助動詞では無くて實は詠歎に用ひてあるのだ。是等も感動的說明体と言ふか。

是れで見れば説明、疑問、感動、命令の四体の中で兼ねぬものは、説明と、疑問と、疑問と、命令と、でわって、説明と、感動と、説明と命令と、疑問と感動と、感動と命令と、だけは兼ぬる事が出來る。

（説明体）　（感動体）

（疑問体）　（命令体）

是れで体裁の事は終はった。

國語講義終

明治三十四年一月廿五日印刷
明治三十四年一月廿六日發行
明治三十四年九月廿五日再版印刷
明治三十四年九月三十日再版發行

定價金四十錢

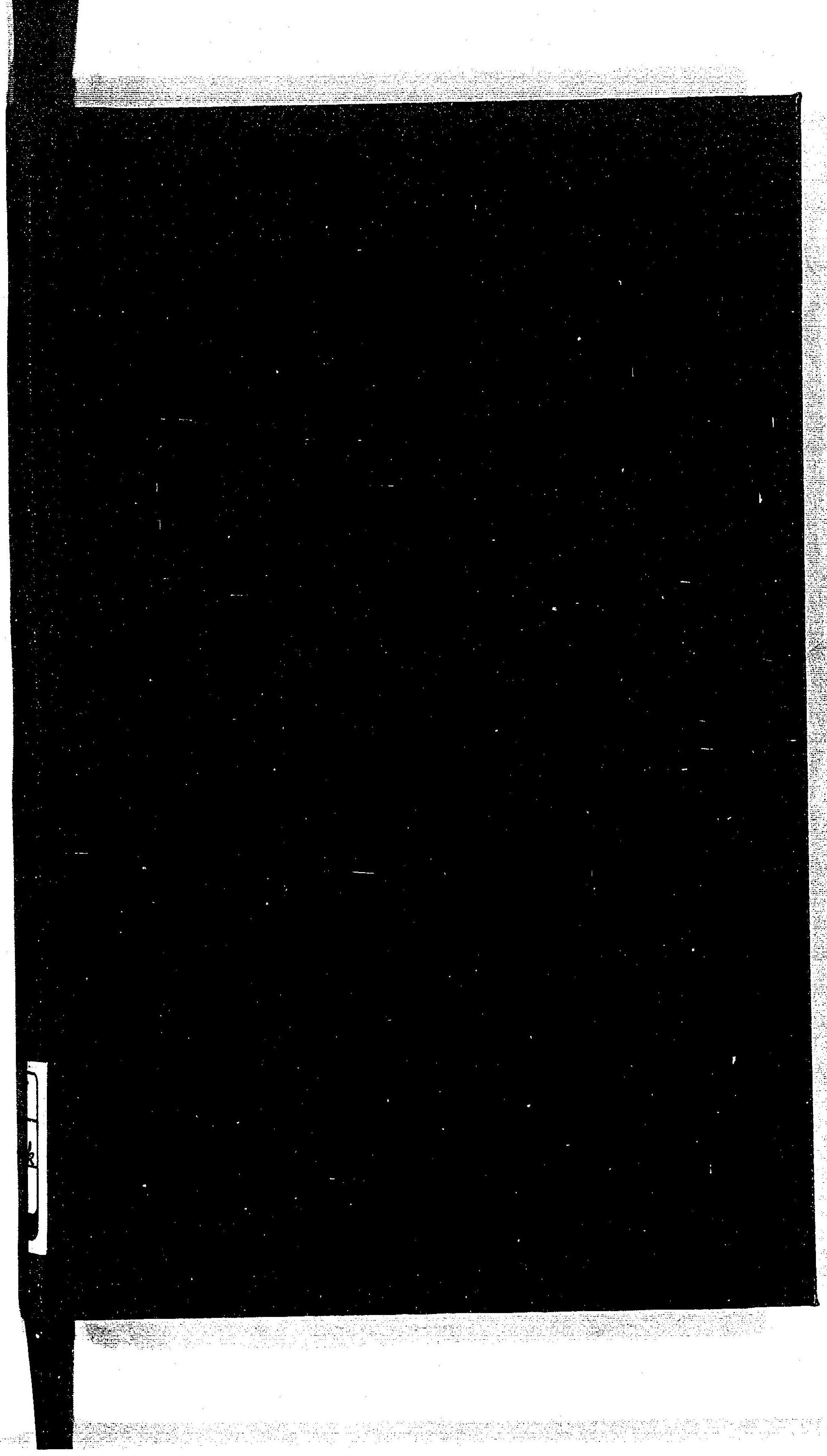
編輯兼發行者　大日本小學教員養成會
代表者　須崎忠輔

發行兼印刷者　東京市小石川區大門町廿五番地　青山清吉

印刷所　東京市牛込區神樂町一丁目二番地　翔鸞社

發行所　東京市小石川區大門町二十五番地　青山堂書舖

파 G-84



810.7
Su718k
(2)

076887-000-8

810. 7-Su718k (2)

国語講義

杉 敏介／述

M34. 9

DAC-0046